

「日本音楽学会国際研究奨励金」受領者報告書

国立音楽大学 非常勤講師

中田 朱美

【発表学会について】

学会名：REEM (Study Group for Russian and Eastern European Music、ロシア東欧音楽学会)

年次学会

学会テーマ：Scandals in Music History

開催日程：2013年11月2日(土) 10:00-15:30

開催地：Denis Arnold Hall, Music Faculty, St Aldate's, University of Oxford

REEMは、BASEES (The British Association for Slavonic and East European Studies、英国スラヴ東欧学会)の下部組織にあたる。BASEESは英国におけるスラヴ東欧研究の最大規模の組織で、13の下部組織があり、REEMはそのうちの一つで、音楽に特化した学会である。

英国ではロシア音楽研究が盛んで、その原動力になっていると考えられるのが、①ロシア音楽研究者たちのネットワーク、②ロンドン大学ゴールドスミス校内にあるロシア音楽センター、各作曲家アルヒーフ、③英国で活躍するロシア人音楽研究者、である。特にここ数十年は、毎年、非常に多くのロシア音楽研究の書籍が世に出されている。

今回、参加したREEMは、英国におけるロシア・東欧音楽研究者のネットワーク基盤と言える組織である。現在、本部はオックスフォード大学音楽学部内に置かれているが、年次学会は英国各地で開催される。毎年、様々なテーマが設定され、自分の研究と関連する研究者たちが集まる形になっている。

次回2014年の年次学会テーマは「Music and Empire in East-Central Europe」で、ダラム大学で開催される。各年の詳細および次回予告については下記URLを参照されたい。

[<http://www.basees.org/study-group-for-russian-and-eastern-european-music-reem>]

【研究発表要旨】

発表テーマ：《ムツェンスク郡のマクベス夫人》からの動機的連関：2つの公式批判という作られたスキャンダルを超えて

発表日時：2013年11月2日(土) 13:30～14:00

要旨：

ソ連音楽史において、1936年の「プラウダ批判」と1948年の「ジダーノフ批判」は、音楽統制の全体主義化をもっとも熾烈に推し進めた、捏造されたスキャンダルであった。そ

ここで展開された論調は、長期間に渡りメディアで繰り返され、音楽界全体の論調として刻印されていく。他国のスキャンダルとの最たる違いは、メディアにおける賛否両論がソ連では不可能であった、つまり反駁が行われ得なかった点にある。結果、作品が再演され、復権を果たすことも望めなかった。

ショスタコーヴィチは、この両スキャンダルで槍玉に挙げられた唯一の作曲家である。ショスタコーヴィチにとって、ジダーノフ批判は文字通りプラウダ批判の再燃を意味した。スキャンダルによってもたらされた影響には様々な次元が考えられるが、個人レベルで捉えた場合、ショスタコーヴィチが両批判後に完成した作品の中に、スキャンダルに対する創造的な反応を認めることができる。具体的には、「プラウダ批判」で酷評され、上演禁止となった《ムツェンスク郡のマクベス夫人》Op.29 の核になっている動機の一つが、1940年代に創られた交響曲、さらに「ジダーノフ批判」の最中に書かれたヴァイオリン協奏曲第1番 Op.77 でやはり重要な動機として応用されている様子を、創作経緯を参照しながら、検証した。

封印された《マクベス夫人》の動機に別の作品中で核となる機能を賦与し続けたことは、両スキャンダルに対する創造者としての返答と捉えることができる。しかし、注意したいのは、これらの動機が登場する箇所、常に一面的な意味論上の説明ができるわけではないということである。可能な解釈の範囲で重要に思われるのは、次の2点である。①捏造されたスキャンダルに見舞われた結果、このオペラのもともと強烈な風刺性を備えていた動機に、ショスタコーヴィチが気質的に一貫した親和性を示していたと考えられる、②一連の作品の系譜を経て、この音型が DSCH のモノグラム音型や《若き親衛隊》からの動機と同様に、作品間における動機的連関を示し、この作曲家の重要な音楽語法の一つになっていた様子が認められる。

### 【質疑、感想と反響】

今回は、英国におけるショスタコーヴィチ研究を牽引している Pauline Fairclough、ロシア・ソヴィエト音楽研究の第一線で活躍する Philip Bullock、Patrick Zuk を始めとする研究者が参加し、彼らからコメントを頂くことができた。まず、Patrick Zuk からは、作曲家のそもそもの音楽語法の性質と、動機的連関に認める作曲家の意図との違いは、どのように見極められるのかという質問があった。これについては、当該動機がどのように登場し、具体的にどのような楽曲で連関を持っているのか、一曲一曲確認し、概観することで、どの程度、意図的な選択か否かを判断することが可能だろう、と返答した。また、発表中、「気質的な親和性」と表現したように、単なる好みの音型と言うことも可能であるが、今回は、その利用の一貫性と経緯から、2つの公式批判をつなぐ発想があった様子が認められた点に注目したい、と答えた。

また Patrick Zuk から二つ目の質問として、自作からの借用が多いショスタコーヴィチ作品の解釈において、借用元の音型が当初備えていた意味は、借用された新たな楽曲の解釈

にどのような関わりを持つのか、新たな楽曲は借用音型の意味から解放されることはないのかと聞かれた。これについては、ショスタコーヴィチの作品論として概観するにはあまりに大きな問題で発表者の説明能力を越えているが、少なくともこうした音楽動機の細部に作品間のコンテクストを捉えることは、一作品の解釈というよりも、作曲家の創作姿勢の理解につながると考える、と答えた。

続いて Philip Bullock から、ショスタコーヴィチ作品の中には最後の完成作品《ヴィオラ・ソナタ》のように、引用に明らかな意図が認められる作品が生涯に渡って存在するため、こうした音楽動機という細部のコンテクストを認める場合でも、音楽外の根拠を重ねて、その有意味性を高めた方が良いのではないか、たとえばグリークマンへの手紙の中で、この時期、《マクベス夫人》のスコアを読み返している、という記述があったように思う、という助言を頂いた。これについては、確かに交響曲第 7 番の執筆中に《マクベス夫人》のスコアを携帯して疎開した報告などには大いに注目しているが、音楽外の外的な情報を根拠として解釈をした結果、これまでこの作曲家の作品解釈は様々に反転してきた経緯があるため、まずは先入見に捕らわれないで、音楽上での論証を目指した、今後、そうした情報もバランスを見ながら適宜、補完していきたいと答えた。

最後に Pauline Fairclough から、本発表で指摘した、交響曲第 7 番、ヴァイオリン協奏曲第 1 番と《マクベス夫人》との連関は明らかに認められると考えるが、そこに《ボリス・ゴドゥノフ》との繋がりまで観察するには抵抗を感じる、このように、過去に遡ってコンテクストを探るのであれば、どこまでも辿れることになりはしないだろうか、当該作品にとって有意味な点が見えなくなってしまうのではないか、との指摘を頂いた。これについては、《マクベス夫人》における当該動機の背景や重要性を確認した上で、後の作品との連関を論証しなかったため、《ボリス》との関連は言及しない訳にはいかない点であったと考えるが、たしかに後の作品でも《ボリス》引用に込めた風刺性が機能しているとは解釈できないので、発表のバランスが悪かったことを認める、と返答した。

以上が、発表 20 分・質疑応答 10 分の全 30 分枠のやり取りである。英国のロシア音楽研究者たちと見解を共有できた喜びは想像以上に大きく、大変光栄であった。発表者の粗末な英会話力にも関わらず、ネイティブの参加者たちが熱心に耳を傾け、専門家ならではの反応を示してくれたことに、心から深謝したい。英語ないしロシア語での情報共有に貪欲な研究者たちから大いに刺激を受けたとともに、国際的な場で発信していくことの必要性を痛感する有難い機会となった。

末筆ながら、今回の参加に助成して下さった住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に深く感謝申し上げます。